ムハンマド
（かれの上に平安あれ）

محمد
صلى الله عليه وسلم

イスラーム入門シリーズ

No.6

واعتصموا بحبل الله جميعا ولا تفرقوا

なんじらはアッラーのきずなに，みなでしっかりとすがり，分裂してはならぬ

宗教法人
イスラミックセンター・ジャパン
ISLAMIC CENTER, JAPAN

一、序　論

イスラームは、アラビア語で「アッラー」と呼ばれる唯一神に絶対的に服従することを、その根本教義としています。

アッラーは、万物を創造し、全宇宙と地上の森羅万象を超越した神なのです。

そしてアッラーに類似し、アッラーと同等に比較できるものは、何一つとして存在しないのです。

アッラーは、我々人間を愛し、我々を導き恵むものとしかれが選んだ預言者を通じ、戒律と規則を人間に与えたのです。

この地上に人類が現われて以来、アッラーは多くの人間の中から、ノア、イブラヒーム、モーゼ、イエスなど多くの預言者を選ばれ、かれらにかれのメッセージを送られてきましたが、これら最後の預言者としてムハンマドを選ばれたのです。

イスラームは、決して新しく生まれた宗教ではありません。

イスラームの教えの中には、神がすべての正しい宗教に下された基本的なお告げが含まれており、ムハンマド以前のすべての預言者達が、人間の導きとして、まったく同じ教えを伝えてきたのです。

最後の預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）は、自分の言動とアッラーから啓示された啓典

（聖クルアーン）を通して、イスラームの意義、すなわちアッラーへの帰依について布教したのです。

我々が預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）を最後の預言者であると信ずる者であることは、きわめて幸運なことです。なぜなら、ムハンマドこそ人間にアッラーへの帰依と平安のお告げをもたらしてくれた預言者だからです。

預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）の生涯はきわめて重要な意義をもっていますが、それは、彼の言葉、彼の性格が、みならうべき最高のものだからです。

同時にまたムハンマドの生涯は、たえざる努力と偉大な成功の歴史でもありました。

彼の生涯は、歴史の中で正確に記録されていますから、その努力と成功について疑いをさしはさむ余地はありません。

これから各章にわたって、預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）の生涯を年代を追ってつづってみることにします。

二、預言者ムハンマドの誕生

預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）はアラビア半島のメッカに生まれましたが、それはイ

スラーム暦紀元前五十四年三月十二日であり、西暦にして紀元五七〇年八月二〇日月曜日の早朝のことでした。

聖クルアーンには、これについて次のように述べられています。

『そして言え、真実が到来し、虚偽は、消え去った。まことに虚偽こそは、とこしえに消え去るものぞ。』

この言葉はムハンマド自身の生涯についてもあてはまり、ムハンマド誕生の日こそ、全人類の祝福と歓喜の日として記念できるのです。

三、ムハンマドの幼年期

ムハンマドの父アブドゥッラーは彼の生まれる六ケ月前に死亡し、彼の母親アミーナも彼がやっと六才になった時にこの世を去っています。

こうしてムハンマドは、幼少にして既に両親の愛情を失なったわけですが、しかし一方では、全生涯を通じアッラーの愛を受け続けてきました。

彼は、メッカのクライシュ族の一支族で由緒あるバヌー・ハーシム家の出身でしたが、母親の死後祖父アブドゥル・ムッタリブにまず養育されました。

しかし、この祖父も母の死後わずか二年でこの世を去ったのです。その後若いムハンマドは、貧しい叔父のアブー・ターリブにひきとられました。

かくして、この広いアラビアの砂漠の中で、父親の保護、母の愛情、そして兄弟姉妹もない一人の孤児がとり残されることになったのです。

しかし、アッラーはすべての人類の中からかれムハンマドを選び、悪と破滅から人間を守るために、アッラーの使徒とされたのです。

四、ムハンマドの青年期

ムハンマドは、隊商で各地に商品を運んでいた叔父のアブー・ターリブを手伝って、商人としてその青年期をすごしました。

ムハンマドは、これらの隊商についてシリアに二度商売の旅に出かけました。

彼は常に何事によらず正直な仕事をするように心がけ、時としては羊の放牧の仕事さえしたのです。

たとえどんな卑しい仕事についても彼は決してそれを恥じることはありませんでした。自分の衣服や靴も自分で繕い、このようにしてムハンマドは正しい労働の尊さを人々に身をもって示したの

です。

五、預言者の布教前の社会状況

ムハンマドは、その幼年期からすでにアラビアの腐敗した社会に強い焦立ちをおぼえていました。当時の人々はいつも飲酒と賭博にその時間を費していました。当時アラビア社会は千々に分裂しており、多くの家系や部族が自分達の利害のみを考え、わずかな理由だけで闘争をくり返していました。

ムハンマドは、人々はすべて一つの家族のようにお互いに兄弟同志として交際すべきであると考えていたので、当時のこのような部族間の抗争については非常に心を痛めていました。

西暦七世紀頃の世界の常として、アラビア人達も婦人を尊敬せず、また自分達の娘を愛することを知りませんでした。

女の子の誕生はあまり喜ばれなかったので、時としては生まれると同時に生き埋めにされ間引きされることもありました。

預言者アブラハムが最初に建立したアッラーへの礼拝の聖地であるカアバ神殿にさえ、三六〇体もの偶像が入り込んでいたのです。これは例えてみれば、一年のうち一日につき一体の割り合いで

・アミーン」、即ち「信頼できる人」とか「正直者」とか呼んでいました。

ムハンマドは非常に高い道徳心の持ち主であり、まわりの人達は皆彼を心から尊敬し、彼のことを「アミ

どんな美しい行為でもほめたたえられることのない当時の社会の中でさえ、ムハン

ました。

いつも行っていたメッカ近くの丘にあるヒーラの洞穴の中で、アッラーについて瞑想にふけってい

いただ一人の男ムハンマド。アッラーは彼を自らの使徒として選んだのです。ムハンマドは、

荒廃した社会の中で、清廉潔白にして慈悲深く、寛容にして正直を歩み、唯一神アッラーを崇め

た人々にアッラーの教えを伝えることになりました。

世界がアッラーの慈愛と導きを再び必要とし、最良の人ムハンマドが選ばれて、人間性を失なっ

六、預言者の人格

ムハンマドはこのような状況をひどく悲しみ、何とかこれを改善したいものだと願っていました。

その影響力を失い、人々の心はまったくすさみきっていました。

めていました。当時は、人間の歴史を通して最も暗黒の時代であり、キリスト教やユダヤ教でさえ

偶像があったことになり、聖地がこのように乱用されているのを見てムハンマドは、非常に心を痛

七、ムハンマドの結婚

商品運搬のための隊商の責任者としてムハンマドを雇っていた多くの商人の中に、ハディージャという名の女性がいました。

ハディージャは、二度夫を失ない息子二人と娘一人がありましたが、その当時は夫から相続した事業を経営してうまく成功していました。

彼女は、ムハンマドにくらべてはるかに金持ちであった上に、年は四十に達しており、一方ムハンマドは、二十五才の若さでした。ムハンマドは貧しい上に無学だったので、ハディージャのような金持ちで名門の女性の夫として選ばれるなどとはとても考えられないことだったのですが、ハディージャは、ムハンマドと共に事業をやっている間に、彼が正直で親切ですべての面で責任感のあるまれにみるすぐれた人物であることを見抜いたのです。ハディージャは、ムハンマドの金銭ではあがない得ない偉大な素質を認めて、自ら身を低くしてムハンマドに結婚してくれるよう申し込みました。

あらゆるものの将来についてすべてを知りたもうアッラーは、その時すでに将来ムハンマドの身にふりかかる多くの困難についても、またハディージャが最初にイスラームに入信し、これから先の苦しい時代にムハンマドを勇気づけ、その力になることもご存じだったのです。

ムハンマドとハディージャは、それから二十五年間ハディージャがこの世を去るまで円満で幸福な結婚生活を送りました。

二人の間にできた三人の男の子はすべて若くして死にましたが、四人の娘は皆長生きでした。ハディージャは、その生存中ずっとムハンマドの唯一の妻でした。

彼女は、ムハンマドが五十才の時、すなわち彼がイスラームの布教を始めてから十年目にこの世を去ったのです。

ハディージャは、自分の夫ムハンマドを彼の布教の最も苦しい時期に全力をあげて援助したのです。

ムハンマドは、彼女の愛と献身を決して忘れることなく、自分の妻を「最も祝福されるべき婦人」と呼んで、彼女の死後も自分の生涯を通じてその愛情を心に留めていました。

ハディージャの死後何年かたってからムハンマドは数人の女性と結婚しましたが、そのうちアーイシャ以外はすべて未亡人か離婚した女性でした。

これは、ムハンマドがこれらの女性を必要としていたというより彼女らこそムハンマドを必要としていたというべきでしょう。

なぜならこれらの結婚は、他の部族との親睦をかためるための政略結婚であり、また死亡した教

の未亡人の生活を支えるためのものであったからです。
しかし、結婚の理由がたとえ政略的なものであれまた慈善的なものであれ、ムハンマドはすべての妻に愛情、尊敬、公正、親切をもって接しました。
こうしてムハンマドは、女を動物に毛のはえたものくらいにしか扱っていなかった当時の人々に、貧富、老若、学識、離婚等の有無にかかわらず、すべての女性達を愛し尊敬することを身をもって教えたのです。
ムハンマドは、人々に対し「天国は、母の足下にある」と告げました。

八、預言者としてのムハンマド

ムハンマドがメッカ郊外のヒーラの洞穴に時々こもるようになってから、彼は、人間、宇宙、万物の創造者、そして人間と創造者との関係について、それらの根本的な問題を考えるようになりました。
彼は、この世界の人間生活の各部分をつかさどる多くの神々が存在したり、人間の手で木や土から作られた偶像が、人間の諸活動に影響力があるなどとは決して信じませんでした。
至高の神アッラーに対してのみ、ムハンマドは、自己の瞑想と信仰を捧げたのです。

イスラーム暦の九月であるラマダーン月のある夜（アラビア語の「ライラトゥル・カドル」即ち「力と崇高の夜」）、当時四十才のムハンマドは、ヒーラの洞穴で瞑想していた時、「読め（アラビア語の〈イクラア〉」という力強い声を二度も耳にしました。

ムハンマドは、驚いて平伏し、「私は読むことが、できないのです」とその声に答えました。しかし、ムハンマドが最後に「私は何を読んだら、よいのでしょうか」と震えながらたずねるまで、その「読め」という命令はくり返されました。

すると、その質問には次の答えが返ってきたのです。

『読め、創造したまえる方、なんじの主のみ名によって。一凝血から、人間をつくりたもうた。読め、なんじの主は、こよなく尊貴であられ、筆によって教えたもうた方、何も知らなかった人間に、教えたもう方であられる。』（クルアーン第九六章　第一―五節）

これは、天使ガブリエルによって伝えられたクルアーン最初の啓示だったのです。

ムハンマドは恐れおののいてすぐ家に帰り、妻のハディージャにその日の出来事を話しました。妻は、優しく彼をいたわりながら、「あなたは、これまで真直ぐに生きてきた正直な人ですから、神様はきっとあなたを守って下さるはずです。何も心配することはありません。」と慰めました。

その後まもなく彼の妻ハディージャは、イスラームに帰依した最初の人になったのです。この最

初の啓示があってから、アッラーは天使ガブリエルを通してムハンマドに啓示を与え、彼がアッラーの教えを広め、誤った人々に正道を伝えるためにアッラーの使徒として選ばれたことを告げられたのです。

この時からムハンマドはイスラームの布教活動をはじめ、神の唯一性、アッラーへの帰依、偶像崇拝のおろかさ、及び現世での行為がアッラーの前で裁かれる最後の審判の日の到来を人々に説きはじめました。

その当時の宗教はただ単に信心だけでしたが、イスラームは、行動を伴なわない単なる信心は全く無意味で人間生活には無益なものであることを人々に強く説いたのです。

クルアーンは、神の唯一性について次のように宣言しています。

「言え、かれはアッラー、唯一者であられる。アッラーは、自存者であられ、かれは産みたまわず、また産まれたまわぬ、かれに比べ得る何ものもない。」（クルアーン第一一二章第一－四節）

アッラーからのお告げはきわめて簡単で基本的なものだったのですが、メッカの多くの偶像崇拝者達には、きわめて危険な挑戦と脅威に感じられたのです。

彼等はこれまでの自分達の生活用式を変えたくはなく、また偶像をすててしまっては自分達の力も失なわれるものと心配して、ついにきわめて残酷で執拗なやり方でムハンマドを迫害しはじめた

のです。
しかし、アッラーに守られている人を実際に傷つけることは誰もできませんでした。

九、布教と妨害

ムハンマドは、まず友人と家族からイスラームの布教を始めました。
このような布教は三年間続き、この時期にイスラームに入信した者はわずか三十人にもなりませんでした。
これらの入信者の中には、ムハンマドの妻ハディージャ、アリー（ムハンマドの従弟で被保護者）ザイド（ムハンマドに解放された元奴隷。――一般に奴隷の身分では対等に協力してゆくことは不可能なので、ムハンマドは彼を解放してイスラームに入信させたのです）、アブー・バクル、ウスマーンおよびタルハ（二人ともムハンマドの親友で、彼の生涯の随行者）などがいます。
三年後、アッラーは、イスラームの布教を公開して行なうようムハンマドに啓示されました。
ムハンマドはメッカ近郊のサファーの丘に行き、そこで神の唯一性、即ち神はアッラーのみであることを人々の前で宣言し、アッラーの最後の審判について強い警告を与えたのです。
ムハンマドは、人々にイスラームへの入信をすすめ、アッラーの教えに従って行動し、正しい道

を歩むよう説きました。
しかし、この事はメッカの人々をひどく激怒させることになりました。なぜならこのような教えは、メッカ市民のあらゆる権力と、今までカアバ神殿の偶像に投資してきたすべての権益を放棄することになるからです。
彼等は、このような公開布教を中止しない限り、どんな目にあわされるかわからないと言ってムハンマドを脅迫しました。
しかし、彼等の脅迫に対する返事として、ムハンマドは、数日後にカアバ神殿におもむき、「アッラーのほかに神はなく、ムハンマドは、アッラーの預言者である。」と高らかに宣言しました。これはアラビア語で「ラー、イラーハ、イッラッラーフ、ムハンマドゥン、ラスールッラー」というイスラームの教義の最も重要な部分として、今日まで伝えられているものです。
非イスラーム信者達はムハンマドへの脅迫が失敗したことを知って驚き、今度は彼を買収しようと考え、金、名誉、女そして王位さえも彼に与えることを申し出たのですが、これに対するムハンマドの回答は次のように簡単なものでした。
「たとえ彼等が、私の右手に太陽を、左手に月を載せてくれても、私はこの聖なる使命の遂行を決して思いとどまらないであろう」と。買収と脅迫が二つとも失敗したことを知ったメッカの人々

は、ムハッマドとその弟子達に対して更に残酷な迫害を加えはじめました。メッカ市民のいうムハッマドとその弟子達の「罪」とは、ただアッラーを信じ、悪業を排し、善行、親切、正義および同胞愛を行為として実践しているということだけだったのです。

迫害を受けたムスリムのうち、ビラール、アンマールおよびハッバブ達は、灼熱の太陽に焼かれた熱砂の砂漠へ投げ出され、胸の上に重い石をのせられるといった拷問を受けました。

また他の信者達は、綱のはしにしばりつけられて街の中をひきまわされたりもしました。またひどくなぐられて死ぬことさえある程でした。

しかし、非イスラーム信者のクライシュ族は、ムハッマドにはこのような拷問を直接加えることはしませんでした。

それはムハッマドが名門バヌー・ハーシム家の出身であり、もしこのようなことをすれば終りのない内戦に転化するかもしれないと考えたからです。

当時は、四十年間にわたる戦争がようやく終結し、彼等はすぐに次の戦いを始める余裕はなかったのです。

しかし、ムハッマドにむかって汚物を投げつけたり通り道に針をまき散らしたりするのは、メッカ市民にとっては日常茶飯事のようになっていました。

ある日ムハンマドが、メッカ郊外のターイフに行ってアッラーの教えを広めていた時に、ムハンマドは群衆から石でひどくなぐられて重傷をおい、ほとんど意識不明になったことさえありました。このようなひどい仕打ちに耐えながらも、ムハンマドは「アッラーよ、彼等に正しい道を示したまえ、彼等は何もわからないのですから」と言い続けました。

こうしてムハンマドは、全人類への平和と愛の伝導者としての道を歩み続けたのです。五年もの間ムスリムの苦しみは日に日に増していきましたが、このような厳しい試練にもかかわらず多くの人々が毎日のようにイスラームへ入信してきました。

またクライシュ族の迫害を逃れて、およそ八十人のムスリムがアビシニヤ（今のエチオピア）に脱出したことがありましたが、クライシュ族の追手は執拗に彼等を追及しました。

しかしムスリム達は、どうにか無事にアビシニヤの地にのがれることができたのです。ところで、預言者ムハンマドが布教をはじめてからの六年間のうちに、非常に重要な人物がイスラームに入信してきます。

これはハムザとウマルの二人ですが、ウマルのイスラームへの改宗は、イスラーム史上画期的な事件とされています。

ウマルは、イスラーム入信と同時に当時偶像崇拝者達の本拠とみなされていたカアバ神殿でアッ

ラーへの礼拝を始めたのです。

これはクライシュ族に対する重大な挑戦であり、これによってクライシュ族を激怒させ、彼等に一大警告を与えたわけです。その後、クライシュ族はイスラーム信者に対する迫害をさらに強めてきましたが、それにもかかわらず、多くの人々がイスラームに入信してきました。

十、排斥

クライシュ族は、ムスリムに数多くの脅迫、買収、拷問を試みましたが、それらはことごとく失敗に終りました。

そこで彼等は、ムハンマド自身に対して行動をおこそうと思い、バヌー・ハーシム一族にムハンマドを引き渡すように要求しました。

しかし、バヌー・ハーシム家の人達はムハンマドをクライシュ族に引渡すのを拒否しました。その結果、バヌー・ハーシム家の人々は、シュアーブ・アブー・ターリブの丘として知られている場所に逃亡しなければならなくなり、そこで三年間生活したのです。

このようにクライシュ族は、バヌー・ハーシム家の人々を完全に村八分にして、彼等との交渉をボイコットしてしまったのです。

そのためバヌー・ハーシム家の人々は、時としては食べるものはなく、しばしば木の根や葉までも食べるほど困窮してしまいました。預言者や弟子達も空腹を満すのに靴の革まで食べたほどです。

さらに彼等は、食べる物だけではなく着る物もなく、まったくみすぼらしい物を身にまとって空腹に耐えていたのです。

このようなみじめな生活の直後、ムハンマドの強力な支援者であった叔父と最愛の妻ハディージャが相ついで世を去りました。

ムハンマドがこの二人の強力な支援者に死なれて、ただひとりとり残されたのを見たクライシュ族は、ムハンマドへの迫害をさらに強めてきました。

十一、希望

この時期、マディーナの市民は毎年メッカへやってきて預言者ムハンマドのイスラーム布教の事をよく耳にしていました。

マディーナの多くの人がイスラームに入信し、ムハンマドにマディーナへ来てくれるよう頼みこんで、もし必要ならば自分達の命さえも提供することをムハンマドの前に誓ったのです。

マディーナ市民のこの誓約はムハンマドにとって、この暗い時代にアッラーの慈悲による一筋の

光明であると受けとれました。

十二、ミアラージュ（ムハンマドの昇天）

この時期にムハンマドは、アッラーから天国と宇宙のすべてを一望のもとに見せられました。

彼はそこですべての預言者に会い、彼等と礼拝を共にしました。

彼はまた、アッラーがこれまで人間に対して与えた恩恵の中で最もすばらしい恩恵を授かりました。

預言者は、いかなる罪人ももしその罪を悔い改め善行を行なうならば、必ず許されることをアッラーより教えられたのです。

一日五回の礼拝とラマダーン月の断食は、この時ムハンマドがアッラーより啓示されました。

ムハンマドの精神的なものはもちろん肉体的なこのすばらしい透視力は、「ミアラージュ」として知られていますが、このアラビア語は「最高の場所に到達した」とか「昇天の栄光」という意味です。

このことは、アッラーの力を最も必要としている時でもあり、彼の布教活動の最悪の時にあたっていたため、預言者を大いに力づけることになりました。

十三、ヒジュラ（マディーナへの脱出）

クライシュ族が、絶望のあまりムハンマドを暗殺することによってメッカでの布教をやめさせようと決意したのは、ムハンマドがアッラーのお告げを受けてから十三年目のことでした。

バヌー・ハーシム家からの復讐を恐れて、暗殺者はそれぞれの部族から一人づつ選ばれ、ムハンマドを殺害した時でも一つの部族だけがその責任をとらなくてもいいようにされていました。

それはバヌー・ハーシム家だけでは、すべての部族と同時に戦えないと判断したからです。しかしアッラーは、暗殺者達の隠謀をムハンマドに啓示していたので、彼は無事に脱出できたのです。

クライシュ族が預言者暗殺を計画した夜、彼等がムハンマドの家を包囲した時、彼は従弟のアリーに自分の代わりにベッドに寝ているように頼みました。

このような危険がさし迫った時でもムハンマドは、他人からあずかった品物を物主にかえすようアリーに依頼することを忘れませんでした。

このことは、ムハンマドがたとえ非イスラーム信者からでさえ、自分に寄せられた信頼はあくまでも尊重しなくてはならないという例を示しています。

それからムハンマドは家を出て、待ち伏せている暗殺者の間をぬって抜け出したのですが、ちょうどその時、アッラーの恵みによって、暗殺者達はわけのわからぬ眠りに襲われ、ムハンマドが通

ってゆくのをまったく気ずきませんでした。

その後彼等は、ムハンマドの寝室に忍びこみ、そこに寝ていたのがムハンマドではなくアリーであることを知ると、激しく激怒しくやしがりました。

しかしその時既に預言者は、信頼する友人アブー・バクルと共にマディーナへの道を急いでいたのです。

警鐘が打ちならされ、クライシュ族は預言者に追手をかけました。

追われる預言者とアブー・バクルの二人は、夜を徹して歩き続けましたが、日が昇った時にサウルの洞穴に着き、休息と追手から身を守るため洞穴の中に入りました。

クライシュ族の一団が洞穴の入口に着いた時、洞穴は荒れ果てとても人がいるけはいなどなかったため、彼等は中に入いらず通りすぎていきました。

アブー・バクルはこの危機に直面して、ただおろおろとあわてふためいていましたが、預言者は『心配することはない。アッラーは、われわれと共にいましたまう』(クルアーン第九章　第四十節)と言って、アブー・バクルを力づけました。

アッラーの慈悲を信じる者は、決して恐れたり自信を失なってはならないのです。

それは、アッラーこそが信じる者にとって最高で最強の保護者であるからです。

クライシュ族が、ムハンマドを生死にかかわらず捕えたものには駱駝百頭を報酬として与えるという懸賞を出したので、多くの人は、懸賞金ほしさと復讐のためにムハンマドを捕えに出かけてゆきました。

しかし誰一人として捕えることはおろか、傷つけることさえできませんでした。

かくして二人は、無事マディーナに到着することができました。

クルアーンではこのメッカ脱出について次のように述べています。

『……かれら（不信心の者たち）は、策謀したが、アッラーもまた計略を整えたもう。まことにアッラーは、もっともすぐれた計略者であられる。』（クルアーン第八章　第三〇節）

十四、イスラーム暦

イスラーム暦は、ムハンマドがメッカからマディーナへ脱出した年を紀元一年と定めています。

イスラーム暦は、ヒジュラ一年の一月一日から始まるのですが、これは西暦六二二年七月十五日にあたります。

人生の中で一番大切なものは、その人の生死にあるのではなく生存中の行為にあるのです。それゆえムスリムの時代は、ムハンマド誕生の日から始まったのではなく、イスラーム史上もっとも意

義ある事件のあった時から始まっているわけです。

このマディーナへの脱出こそ、イスラームの成功と発展のための大きな転機となった日なのです。

十五、マディーナでのイスラーム社会

預言者とアブー・バクルは、マディーナに着くやいなや多くのムスリムの大歓迎を受けましたが、これらの人々の中には、マディーナ市民のほかに預言者よりも先に家族と共にメッカを脱出してきた多くのムスリムも含まれていました。

マディーナの人々は、預言者が自分の家に来て住んでくれることを心から願っていたので、預言者は、誰か一人の家に住むことを決めて他の人を悲しませたりしないように、自分の駱駝の手綱をはなして自由にマディーナの市街を歩かせ止まった所に住むことにしました。

おそらくアッラーの導きによるものと思われますが、駱駝は二人の孤児の所有している空地にとまり、そこで草を食べはじめました。預言者は、その場所に住むことを決め、二人の兄弟に土地の代価を支払い、そこに預言者の住居を兼ねたイスラームで最初のモスクを建てたのです。

これは、ずっと後世までこのモスクを含めたすべてのモスクは、アッラーへの礼拝の場としてだけでなく、家のない者や旅行者の宿泊所とか一般事柄を討議する集会の場所になったのです。

マディーナへの到着後まず最初に必要となったのは、メッカからの入国者の生活必需品の供給でした。

これらのムスリム達は、自分の財産のほとんどすべてをメッカに残したままになっていたので、マディーナでの生活手段や住居が決まるまでは、多くの援助が必要だったのです。

アンサール（援助者）という名で呼ばれるようになったマディーナのムスリム達は、イスラームのために、家族の絆も家も財産もすべて投げ出してメッカからのがれてきたムスリム同胞と兄弟の契りを結び、喜んで財産をわけ与えたのです。

このようなマディーナ市民の同胞愛によって、この新旧二つのグループは互いにうちとけ合い、一つの社会共同体を形成していきました。ムハンマドとその弟子達は、ようやくクライシュ族の絶えざる迫害からも逃がれて安全な日々を送れるようになったのです。

むろん多くの不信心者達（クライシュ族）は、なおもムハンマドとそのイスラーム社会の破壊を意図してはいましたが、マディーナまでは三二〇キロも離れているためメッカにいる時のような具合いにはいきませんでした。マディーナでの預言者の布教活動は最後の段階に入り、天恵の道に基づいたイスラーム社会の建設に移っていきました。

預言者がメッカで受けた啓示は、信仰に関するものが主でしたが、マディーナでのそれは、人間

行為のあらゆる面に関するきわめて広範囲なもので、飲食物からはじまり結婚と家族生活、道徳と作法、取り引きと商業、平和と戦争、罪と罰等に関するものでした。

ただ預言者に啓示された特別な訓戒や教義は、すべて普遍的なものではありますが、実際にそれを預言者からきいて行動に移したのは預言者の高弟達でした。

ムスリムの共同体を一つの社会組織として作りあげる事は、最初はクライシュ族の妨害のため非常に困難でしたが、マディーナにおいては、預言者はそれぞれの信者の共同体をまとめて一つのイスラーム社会を作り上げることに成功したのです。

イスラームは、単なる信仰でもなく個人的な儀式でもありません。

イスラームは、各個人と共同体のための生活の道であり、人生のすべての面が、その規範と慣習とに規制されているものなのです。

良い共同体はそれによって良い個人をつくり、また反対に良い個人の集まりは良い共同体をつくることになり、個人と共同体が互いに他方から影響されているのです。しかしイスラームの共通の信仰と生活用式によって、信者達が団結し一つの強固な組織をつくりあげても、まだ彼等は、多くの敵から脅威を受けていました。

また異なった部族の中にも、ムスリムを迫害し、また裏切ってクライシュ族と共謀したりしてム

スリム社会を破壊しようとする人々がいたのです。

このように不平分子に対抗しムスリムの共同体は、常に防衛を固め、時にはそれらの敵に対して何らかの手段を講じなくてはならないこともありました。

さらにクライシュ族は、この真実と正義を愛する人々を抹殺しようと考え続け、ついにはムスリムと一戦交えるために武器をとって立ち上がったのです。

イスラーム暦二年、突如重武装したクライシュ族の部隊一千人がマディーナにむかって進軍してきました。

この部隊は、貧弱な武器しか持たないままにあわせの三百人のイスラーム軍とバドルで遭遇しました。

クライシュ軍は、数と武器の点ですぐれ、また策略にもたけていましたが、イスラーム軍は、アッラーの加護を受け、クライシュ軍をしりぞけました。この戦いは『バドルの戦い』と呼ばれます。この勝利によってムスリム達は、道徳的精神的に自信をもち、クライシュ族の野望を一時的には撃退することができたのです。しかしわずか一年後には、彼等はムスリム攻撃のため再びマディーナへ軍を進めてきたのです。

この時は、クライシュ軍は戦いでは勝利を得ましたが、イスラーム側は最後には彼等を追い返す

ことができました。
この会戦は、『ウフドの戦い』といわれています。その後クライシュ軍は、マディーナを包囲し、数週間にわたって兵糧攻めにかかりました。その間食糧は極度に欠乏し、人々は胃の上に石をしばりつけ空腹に耐えながら抵抗しつづけました。
しかしアッラーは、ムスリムに味方し、遂にクライシュ軍を撃退したのです。
ムスリムはきわめて精神堅固で、自己の生命さえ惜しまずイスラームのために喜こんで死んでいきました。
アッラーは、信者達に正義と正道を守るために戦うように命じられたので、彼等は自分の力と資財のすべてを捧げて、アッラーの呼びかけに応えたのです。
このイスラームの道のため闘うことを、ジハード（聖戦）といいます。
ジハードとは、イスラームのために奮闘するという意味ですが、これは単に戦場で戦かうことだけでなく、もっと広義の意味があるのです。ジハードとは、自分の時間、力、財産、才能、および人生のすべてを捧げてアッラーのために献身することをいうのです。
晩年になってから預言者は、大国の首長になりましたが、それでも彼の生活はきわめて質素で厳格なものでした。

預言者とその家族も、時には日用品さえ不足することがありました。
彼のすべての言動はイスラームの生きた例証であり、彼の教えと生活態度を通し人々は自分達の心をしっかりとアッラーに結びつけたのです。
預言者の言動は彼の高弟達の手で正確に記録され、ハディース（預言者言行録）として編集されて今日まで伝えられてきたため、現代の我々はこれを見て自らの生活の規範にすることが出来、まことに幸運といわねばなりません。

十六、メッカへの再入城

イスラーム暦七年に、フダイビーヤ協定がクライシュ族との間で締結されました。その頃すでにクライシュ族は、ムスリムの強大な力におそれを抱きはじめていました。
ところで、この協定の条項にしたがって預言者（かれの上に平安あれ）とその弟子たちはアッラーの聖なる神殿カアバへの巡礼を行うためメッカに向いました。
しかし、翌年にはクライシュ族がこの協定に違反したためこのフダイビーヤ協定は、わずか一年で破壊されてしまったのです。
しかし、多くの信者をひきつれた預言者はクライシュ族の永年の敵対行為を永久にやめさせるた

めに、もしできれば血を流さずにこの目的を達しようと、メッカに向って進軍を開始したのです。

これに抵抗することが今では不可能であると判断したクライシュ族は、ムハンマドの軍門にくだり、預言者はかつて自分が最初にアッラーの啓示を人々に伝えた思い出の街メッカに無血入城したのです。

かれはカアバ神殿に入り、唯一の神アッラー、絶対無比の神アッラーの神殿を永年にわたって汚してきたすべての偶像を破棄してしまいました。

預言者とその弟子たちを長い間迫害しつづけた預言者の敵たちは、今や敗者として彼にあわれみをこい、彼からの懲罰が下るのを待っていました。預言者（かれの上に平安あれ）はこのたびムスリムに与えられた勝利をアッラーに感謝したのち、おそれおののくメッカの人々に「今わたしが、おまえたちに何をしようと考えていると思うかね」とたずねました。かれらは不安そうに「気高いお方と、気高いお方の子供であるムハンマド様、すべてはあなた様の意のままに……」と答えました。

全世界の人々への慈愛と救いとをもたらした預言者ムハンマドは、「今日お前達には、なんのとがめだてもしない。みな自分の家庭に帰りなさい。お前達はみな自由なのだ。」告げられました。

このようにして、預言者は降伏した敵の扱い方をすべてのムスリムに示されたのです。

その後二年の間、すなわちイスラーム暦の十年までに、ユダヤ教徒やキリスト教徒を含めて数多くの人々がイスラームに入信しました。イスラームの教えを受け入れなかった人たちも平和に安全にそして充分な保護のもとに、安らかに生活を送りました。

これはクルアーン第二章、第二五六節にも述べられているとおりです。

『宗教には強制があってはならぬ。』と。

十七、ムハンマド最後の巡礼

預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）は、イスラーム暦十年に最後の巡礼を行いました。かれがイスラームの布教を始めてからわずか二十四年しかたっていなかったのですが、預言者のこの最後の巡礼に従ってメッカに入った信者は実に一一万四千人の多数におよんでいたのです。

これまでのどの預言者もこれほどの奇跡的大成功を収めたものは一人もありませんでした。わずか十一年前にはメッカよりのがれ、その首に賞金をかけられていた一人の男が、今や全アラビアの指導者となったのです。

この巡礼の時にかれが人々に与えた「最後の垂訓」は、これまでのかれの布教の総仕上げでもありました。かれは神の唯一性、アッラーの教えの尊厳、来るべき最後の審判の日、女性への尊敬の

気持ちおよび生命と財産の重要性を強調して次のように述べたのです。

「イスラームの信者は、すべてお互いに同胞であることを知れ。おまえたちは、みな一つの同胞として結ばれている。わたしはおまえたちと共にある。おまえたちが、アッラーの啓典クルアーンと、アッラーの使徒の言行にしたがえば、決して道を誤ることはないであろう。」

この時かれは、アッラーからの最後と思われる啓示を受けたのです。

「われは今日ここになんじらのために、宗教を完成し、これによっておまえたちに対するわが恵みを完全にした。われはおまえたちの宗教としてイスラームを定めた。」(クルアーン第五章 第四節)

十八、預言者の死

預言者(かれの上に平安あれ)はついに病いに倒れ、一時快方に向いましたが、次第に病状は悪化し、かれの力も急速に弱まってきました。

イスラーム暦四月十二日月曜日の朝(西暦六三二年六月八日)、ささやくような祈りの言葉と共に最後の預言者ムハンマド(かれの上に平安あれ)の魂は「栄光ある天上のアッラーのみもと」へ召されたのです。

『まことにわたしたちはアッラーのもの、アッラーにわたしたちは帰るのだ』(クルアーン第二章

第一五六節）

マディーナの人々は深い悲しみに包まれ、とくに預言者（かれの上に平安あれ）の教友の一人であったウマルは、悲しみのあまり預言者の死を信じようともしませんでした。かれがモスクへ入ると、たまたま多くの人々が礼拝をささげながら預言者の死について語り合っていました。その時ウマルは「預言者がなくなられたなどという者は、だれでもこの俺が殺してやる。」とどなりつけたのです。

ウマルは預言者に最も身近かな存在でありまた教友の中でも重要な人物だったので、人々は恐れおののきただオロオロするばかりでした。人々の間には混乱が生じたのですが、教友の一人アブー・バクルが、「もしおまえたちが、ムハンマドを礼拝の対象とするならば、かれはほんとうに死んでしまったのだ。しかし、おまえたちがアッラーを信仰するならば、預言者はいまでも生きておられ、決して死なれることはない」といって、人々を真のイスラームの道に引き戻したのです。

十九、結　語

聖預言者（かれの上に平安あれ）は、世の人々への最高の模範としてその全生涯を送りました。かれは人間の行為の全般にわたって一つの革命をもたらしました。

無統制で弱いアラビア人たちが、イスラームに入信し、それぞれの場所においてイスラームの教義を守り、高貴で完成された人間へと変わっていったのです。

預言者（かれの上に平安あれ）の生涯は、クルアーンの教えを実際に身をもって示したのです。かれこそ後世の人びとの模範となる最高の人物でした。

預言者は神でもなく、また神の子でもありません。他のすべての預言者達と同じように一人の人間でした。ただかれは、神の最後の預言者として全人類に救いの道を示しました。クルアーンの中でも次のようにムハンマドを称しています。

『まことにアッラーのみ使いには、アッラーと終末の日を切望し、アッラーを、多く唱念する者にとり、立派な模範がある。』（クルアーン第三三章　第二一節）

「まことにアッラーと諸天使は預言者を祝福する。信ずる者よ、彼を祝福し、尊敬せよ」（クルアーン第三三章　第五六節）

神の最後のみ使いである聖預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）が、われわれに示された正しい教えに従って、イスラームの道を正しく歩むための、智恵と力とをおさづけ下さるよう、アッラーにお祈りいたします。

二〇、預言者ムハンマドの伝承集

○人の行為は、そのもととなる意志によって、その善悪を判断される。
○親から子への最高の賜り物は、子供への教育である。
○アッラーの喜びは、両親の喜びの中にあり、アッラーの不興は、両親の不興の中にある。
○幼い者に慈愛の心をもたず、年長者を尊敬しない者は、われわれの仲間ではない。
○知識を追求することは、イスラームの信者すべての義務である。
○ムスリムの中で、もっとも信仰の厚い者は、礼儀作法がもっとも正しく、自分の妻をもっともよく扱かう者である。
○アッラーの目から見て、許されているもののうち、もっともいむべきものは離婚である。
○アッラーの手によってのみ、わが命はある。自分を愛すると同じように、兄弟を愛さなければならない。それ以外は、イスラームの信者ではない。
○ムスリムとしての真実のあかしは、自分の関係のないことには余計な関心を払わないことである。
○人は死んでも、次の三つは残る。
その人が死んでも引続き行なわれる慈善、後世の役に立つ知識、及び彼のために祈る心の正しい子孫である。

○まことにアッラーは清純であられ、また清純なる者を愛される。アッラーは慈悲深くあられ、また慈悲深い者を愛される。

○アッラーは寛容の方であらせられ、また寛容の者をめでたまう。

○まことに謙遜と信仰とは、相伴なうものである。一方が失なわれれば、他方も失なわれていく。

○一人でいることは、悪い友を持つよりはよい。良い友を持つことは、孤独でいるよりはよい。正しい事を行なうことは、沈黙よりもよい。悪業を行なうよりは、沈黙を守る方がよい。

○善行を説く者は、それを実践する者と同じ立場にある。

○アッラーからの恵みは、二つあるが人々の多くはそれを知らないでいる。すなわち健康と余暇である。

○宗教は、すべての暴力に対する抑制である。ムスリムは決して暴力をふるってはならない。

○アッラーが最初に創造したもうたものは、知性である。

二一、本書での人名、地名およびアラビア語の説明

○ヒジュラ（Hijra）

預言者ムハンマドのメッカからマディーナへの脱出。この年をイスラーム暦では、元年と定めて

います。（西暦六二二、七月一五日）

○アブドゥッラー（Abdullah）

預言者ムハンマドの父。ムハンマドの生まれる六ケ月前にすでに死亡していました。

○アミーナ（Amina）

預言者ムハンマドの母。預言者六才のときに死亡。

○バヌー・ハーシム（Banu Hashim）

預言者の出身の家系で、聖地メッカでの名門の一つとして知られています。

○クライシュ（Quraish）

アラビアの部族の一つで、ムハンマドの布教にたえず迫害を加えたが、イスラーム暦八年についに預言者ムハンマドに降伏した。

○カーバ神殿（Kacabah）

預言者アブラハムが最初に建立した聖なる神殿。

○ヒーラの洞穴（Cave of Hira）

メッカ郊外の洞穴で、預言者ムハンマドは、いつもこの洞穴にこもって瞑想にひたりました。

○アル・アミーン（al-Amin）

アラビア語で、「正直者」とか「信頼できる人」という意味で、預言者ムハンマドは青年の頃、メッカの人々からそう呼ばれるほど誠実な人でした。

○ハディージャ（Khadija）

メッカで商売を営む裕福な未亡人で、ムハンマドはもと彼女の使用人であったのですが、彼女はムハンマドの人物を見込んで自分から結婚を申し込みました。彼女が四十才、ムハンマドが二十五才の時のことであります。また彼女は、イスラームに入信した最初の人としても知られています。

○アーイシャ（Aisha）

ムハンマドは、妻ハディージャの死後多くの女性と結婚しましたが、その大部分は未亡人や離婚した女性でありました。そのうちアーイシャだけはそうではなかったのです。

○ラマダーン（Ramadan）

イスラーム暦の九月で、断食月ともいわれています。ムハンマドがミアラージュ（昇天）したときに、アッラーより断食の啓示をうけたといわれています。

○ライラトゥル・カドル（Lailat－ul－Qudr）

みいつの夜。ムハンマドが四十才の時、かれはヒーラの洞穴で、この夜天使ガブリエルを通して

初めてアッラーの啓示を受けたのです。

○イクラア（Iqraa）

アラビア語の「読め」という意味で、天使ガブリエルが最初にムハンマドに話しかけた言葉です。

○ハディース（Hadith）

預言者の言行録。クルアーンに次ぐ イスラーム法の法源 とされています。

○アリー（Ali）

ムハンマドの従弟で、預言者の妻と同時に、最初期にイスラームに入信した人の一人であります。

○ザイド（Zaid）

ムハンマドによって解放された奴隷で、最初の入信者の一人です。

○アブー・バクル（Abu-Bakr）

最初の入信者の一人で、ムハンマドとは親友同志の間柄で、マディーナ脱出のときから、預言者の一生を通して、その教友として行を共にしました。

○ウスマーン（Othman）

最初の入信者の一人で、預言者に従がった教友の一人です。

○タルハ（Talha）

アブー・バクルやウスマーンと同じ頃に入信し、生涯を預言者の教友としてすごした人です。

○サファー（Safa）

メッカ高外の小高い丘。ムハンマドがイスラームの布教をはじめてから三年目、アッラーの啓示によってこの地ではじめてメッカの人々の前で公開の布教を行なったのです。

○ビラール、アンマール、ハッバブ（Bilal，Ammar，Khabbab）

三人ともイスラーム初期の入信者で、クライシュ族により灼熱の砂漠で、死の拷問を受けた人たちです。

○ターイフ（Taif）

メッカ郊外の地名で、ムハンマドはこの地で布教活動中に、クライシュ族に石で打たれ、重傷を負ったのですが、それでもかれは「アッラーよ、かれらに正しい道を示したまえ、かれらは何をもわからないのですから」といわれたのです。

○アビシニア（Abysinia）

今のエチオピアのことで、イスラームの初期、多くの信者がクライシュ族の迫害を逃れて、この地へ脱出しました。当時イスラームの信者は、この地で充分な保護を与えられました。

○ハムザ（Hamza）

預言者の叔父であり、また乳兄弟であった教友。預言者の高弟の一人。

○ウマル（Umar）

ハムザと同時期に入信した人で、ムスリムとして、はじめてカアバ神殿で礼拝を行ったことで、イスラーム史上画期的な人物とされています。

○シュアーブ・アブー・ターリブ（Shuab-Abu-Talib）

預言者ムハンマドの属するバヌー・ハーシム一族がメッカの人々からボイコットされ、難をのがれて隠れ住んだ土地。

メッカ郊外にあり、彼等はここで言語を絶する苦難の生活に耐えたのです。

○ミアラージュ（Mi'rāj）

ムハンマドの昇天で、彼がアッラーの恵みにより、天国を見たことを指しています。

○サウールの洞穴　（Cave of Thaur）

ムハンマドが、メッカからマディーナへ脱れる時に、その教友の一人アブー・バクルと共に隠れて、クライシュ族の暗殺者から難をのがれたところです。

○ムハッラム（Muharram）

イスラーム暦の一月。

この一月一日が、イスラーム暦の最初の日で、これは西暦六二二年七月十五日に当ります。

○アンサール（**Ansar**）

アラビア語で「救援者」の意味。

ムハンマドと共にマディーナへ逃れた多くのムスリムに生活の資や住居を与えて、暖かく迎えた当時のマディーナ在住のムスリムのことを人々はこう呼んでいます。

○バドゥルの戦い（**Battle of Badr**）

イスラーム暦二年に、重武装した一千のクライシュ軍を貧弱なわずか三百人のイスラーム軍が打ち破ったマディーナ郊外の戦いを指します。

○ウフドの戦い（**Battle of Uhud**）

バドゥルの戦いから一年後、クライシュ族が、マディーナに再び来襲した時、これを迎撃したイスラーム軍との間でおこなわれた戦いで、この時はイスラーム軍が敗退し、以後マディーナは数週間の間、敵の包囲下にありました。

○フダイビーヤ協定（**Treaty of Hudaibiya**）

イスラーム暦七年にクライシュ族とムハンマドとの間に結ばれた和解の協定ですが、クライシュ族の違反により、翌八年に破棄されました。

○ヒジュラ暦（イスラーム暦）

西暦六二二年七月十五日をイスラーム紀元元年と定めたイスラーム暦のことで、ムハンマドがメッカからマディーナへ聖遷した年です。

○最後の垂訓（Last Khutba）

預言者は、イスラーム暦の十年、彼がイスラームの布教をはじめてから二十四年目にメッカへ最後の巡礼をしました。

この時彼に従った信者は、十一万四千もあったといわれています。

そこで預言者は、人々に最後の説教をして、神の唯一性を強く説いたのです。

○ラビーウル・アウワル（Rabi ul Awwal）

イスラーム暦の四月で、その月の十二日の朝預言者ムハンマドは永眠されたのです。この日は、西暦六三二年六月八日に当ります。

イスラームについての諸出版物を御希望の方は、左記の諸団体へ御連絡下さい。

東京
○㈱東京イスラーム　マスジド（閉鎖中）
東京都渋谷区大山町1の19　〒151
○㈱日本ムスリム協会　03（370）3476
東京都渋谷区代々木1の24の4　〒151
○在日インドネシア人ムスリム協会
東京都品川区東五反田2の9　インドネシア大使館気付
03（441）4201　内線56
○日本イスラーム友好連盟　03（230）2756
東京都千代田区平河町二―一五―四
徴資研エンジニアリング内　常木ビル1F
○イスラーム文化研究所　03（467）2036
東京都渋谷区富ケ谷二の13の22　森本方
○アラビック・イスラミック・インスティテュート
03（370）5995㈹
東京都渋谷区代々木4の27の25　東信ビル内

京都
○関西ムスリム学生協会　075（641）0292
京都市伏見区深草大門町26
○㈳日本イスラーム友愛協会（纂山享）
075（642）1346
京都市伏見区深草西浦町4の36　纂山設計事務所　〒612

大阪
○㈱日本回教寺院（ジャパン・イスラミック・モスク）
イスラミック・スタディ・ソサエティ（小村不二男）
大阪市北区西天満4の6の16　三和ビル3F　〒530

神戸
○㈱神戸イスラーム　モスク　078（231）6060
神戸市中央区中山手通り2の25の14　〒650

奈良
○奈良イスラームセンター（中村満次郎）
0742（48）5647
奈良市二名町1303　〒631

徳島
○徳島イスラーム教育センター（木場公男）
徳島ハーリド学院　〒770　0886（52）7595
徳島市西船場町1丁目13　新居ビル4F

仙台
○イスラーム文化センター（真壁良治）
0222（67）1716
仙台市片平1の2の40　清香ビル3F

金沢
○日本イスラーム青年同盟（泉麗豊）
0762（44）7019
金沢市泉本町1の7の2　泉麗書店　〒921

北海道
○㈱北海道イスラーム文化センター（荒井節雄）
苫小牧市矢代町2丁目5の11
0144（73）3520

※㈱＝宗教法人　㈳＝社団法人

◆イスラーム入門シリーズ

「サラート」（礼拝）①
「サウム」（断食）②
「ザカート」（喜捨）③
「ハッジ」（巡礼）④
「イスラームの生き方」⑤
「ムハンマド」⑥
「イスラームの家族生活」⑦
「イスラームの政治理論」⑧
「イスラームの休日と儀式」⑨

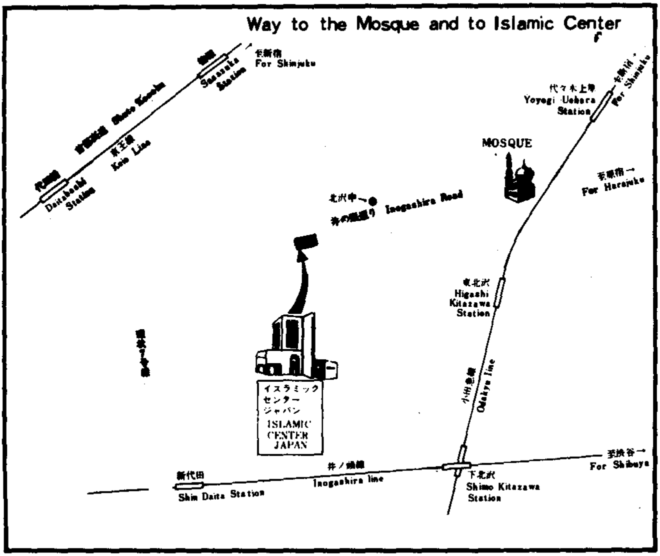
◆『アッサラーム』バックナンバー

一～八、十～十四号は絶版となっています。
九号　「メッカ大巡礼―　ハッジ」二〇〇円
十五号「イスラーム未来への挑戦」二〇〇円
十六号「イスラームと人権問題」二〇〇円
十七号「イスラーム復興の根底を探る」二〇〇円
十八号「エルサレム開放に向けて」二〇〇円
十九号「イェルサレムその現代的視点」三八〇円
二十号「信教の自由」三八〇円
二十一号「サハーバの時代」三八〇円
二十二号「イスラーム経済Ⅰ」三八〇円
二十三号「イスラーム経済Ⅱ」三八〇円
二十四号「クルアーン（コーラン）」三八〇円
二十五号「近代のイスラーム復興運動」三八〇円
二十六号「イスラーム世界のさまざまな相貌」三八〇円
二十七号「メッセージ特集号・
　　　　　イスラーム世界は今？」五〇〇円
二十八号「イスラームの伝統と現在」五〇〇円
二十九号「アラブ・イスラーム詩」五〇〇円
三十号「イスラームの医薬」五〇〇円
三十一号「イスラーム美術Ⅰ」五〇〇円
三十二号「イスラーム美術Ⅱ」五〇〇円
三十三号「異文化と出会う」五〇〇円

◆その他の刊行物

「イスラームの教育哲学」
「イスラームと社会的責任」
「聖クルアーンとハディース」
「ジハード　神の道のために」
「預言者としてのムハンマド」
「神の預言者達」
「イスラームの子供の本」
「イスラームとはなにか」
「ヒジュラ・カレンダー」
「サハーバ物語」一、八〇〇円
「40のハディース」六〇〇円
「コーランとハディースの根本教義」巻Ⅰ・Ⅱ
　　　　　　　　　　　　　　　各四八〇円
「アッサラーム・英文ダイジェスト」五〇〇円
「イスラーム概説」一、八〇〇円

※御希望のものがありましたら、当センターまで御申し込み下さい。
なお価格表示のないものは無料で配布致します。



1-16-11, Ohara, Setagaya-ku, Tokyo
〒156　東京都世田谷区大原1-16-11　TEL.(03)460-6169(代)

聖クルアーン朗唱テープやイスラームに関する講演、討論会のテープ、その他の諸文献、刊行物並びにイスラーム圏諸国に関するフィルムについては、当センターへお問い合わせ下さい。当センターでは、相互理解を深めるため、皆様の御利用をお待ちしております。

1985年6月1日発行

発行所　イスラミックセンター・ジャパン

所在地　東京都世田谷区大原1—16—11
〒156
TEL（03）460—6169

預言者ムハンマド目次

慈悲深く仁慈あまねきアッラーのみ名によって